

エヴェンキ語は、アルタイ諸語の一つであり、アルタイ語の特徴の一つは、属格主語を持つことである。Nedjalkov (2014)は、エヴェンキ語研究の先駆者であるが、その著作に、属格主語の例が一つもない。本稿では、「エヴェンキ語は、アルタイ諸語の一つであるから、属格主語が存在するはずだ。」と仮説を立て、母語話者である Sarina 氏をコンサルタントとして、本仮説の検証を行った。その結果、エヴェンキ語には、属格主語が存在することが明らかになった。その後、属格主語の分布に関して、エヴェンキ語、日本語、そして、モンゴル語を比較し、以下を発見した。(I) アジアの対格言語の多くは、属格主語を許容し、(II) 属格主語を許容する言語は、大きく、エヴェンキ語型とモンゴル語型とに分けられ、(III) 日本語は、エヴェンキ語型に入り、他動性制限が独立した言語要素であるなら、エヴェンキ語は、日本語とモンゴル語との中間に位置することになる。

1. はじめに

エヴェンキ語を話す人々は、ツングース系民族の一つで、ロシア国内では、クラスノヤルスク地方にある旧エヴェンキ自治管区地域や、サハ共和国などに居住し、中国国内では、内モンゴル自治区エヴェンキ族自治旗や黒竜江省などに居住している。「エヴェンキ」とは「森に住む人」、「高い山の森林から降りてきた人たち」、「山林から平原へと降りてきた人たち」を意味する。エヴェンキ語話者は、およそ 6 万人から 7 万人程度で、ロシアに約 3 万 5 千人、中国に約 3 万人、モンゴル国に約 1000 人居住している。

Nedjalkov (2014)は、エヴェンキ語統語論研究の先駆者である。エヴェンキ語は、アルタイ諸語の中で、ツングース諸語の一つであると考えられている。これまで、アジアの言語における属格主語の認可・属格主語の分布に関する研究は、統語論研究において、重要な位置を占めてきた。Harada (1971)以来、日本語における属格主語の認可条件の探索は、多くの言語学者によって実践されてきた。(とりわけ、Miyagawa (1993, 2011, 2012, 2013), Watanabe (1996), Hiraiwa (2001), Ochi (2001, 2009), Harada (2002), Kobayashi (2013)など) また、これらの調査を基に、Maki et al. (2015, 2016)は、モンゴル語における属格主語認可の条件を調査した。これまでの調査で、当然のことながら、日本語やモンゴル語には、明確に属格主語が存在することが分かっている。しかしながら、アルタイ諸語の一つのエヴェンキ語に関しては、Nedjalkov (2014)の関係節に関するデータを見る限り、属格主語の例が一つも提示されていない。さらに、索引に、genitive という項目もない。そこで、本稿では、(1)を仮説として設定し、中国内モンゴル自治区エヴェンキ族自治旗在住でエヴェンキ語母語話者の Sarina 氏からデータを得ることで、(1)の妥当性を調査する。

(1) 仮説: エヴェンキ語は、アルタイ諸語の一つであるから、属格主語が存在するはずである。

2. 背景

主格・属格交替現象は、Harada (1971)によって、最初に指摘された。(1)において、関係節内の主語「卵」は、主格の「が」、あるいは、属格の「の」によってマークされてよい。

(2) [土曜日に卵が/の安い] 店は、この店です。

(2)では、副詞的要素「土曜日に」が、関係節の先頭に置かれており、属格主語が、LF 以前の統語部門においては、関係節内部に留まっていることを保証している。

その後、この現象は、数々の言語学者に調査されてきた。その中で、主要な 2 つの属格主語認可に対する仮説を概観する。Miyagawa (1993, 2011, 2012, 2013)の名詞認可仮説、Watanabe (1996)/Hiraiwa (2001)の連体形認可仮説である。

名詞認可仮説と連体形認可仮説は、(2)における属格主語「卵の」を、それぞれ、名詞「店」、述語「安い」の連体形によって、認可する。さらに、連体形認可仮説は、(3)のような一見名詞がない構造において属格主語が出現できる例の文法性を的確に予測することができる。

(3) 太郎は、[完全に雨が/の止む]まで、オフィスにいた。

3. エヴェンキ語データ

3.1. 基本構造

まず、エヴェンキ語の文の基本的構造を見る。第一に、格助詞について見てみよう。(4)で見るように、エヴェンキ語には、主格に音声がない。そのため、 $-\emptyset$ で表示する。対格は、 $-be$ である。ただし、目的語に人物が来なければ、音声がなくても構わないので、(5)で見るように、対格も、 $-\emptyset$ で表示される場合がある。

(4) Mandi- \emptyset Xiwen-be magta-sa.
 マンディ-Nom シヴェン-Acc 褒めた
 ‘マンディがシヴェンを褒めた。’

(5) Mandi- \emptyset teya dotere- \emptyset ka-saa.
 マンディ-Nom その 本-Acc 買った
 ‘マンディがその本を買った。’

(4)と(5)は、他動詞の例である。一方、自動詞の例は、(6)と(7)である。

(6) Mandi- \emptyset tinubo an-see.
 マンディ-Nom 昨日 来-た
 ‘マンディが昨日来た。’

(7) Mandi- \emptyset tinubo mete-se.
 マンディ-Nom 昨日 笑っ-た
 ‘マンディが昨日笑った。’

(6)と(7)における自動詞の主語と(4)における他動詞の目的語の格が同じではなく、他動詞の主語だけが、特別な格を持たないことから、エヴェンキ語は、日本語やモンゴル語様、対格言語であり、ウルドゥ語や土家語のような能格言語ではないことが分かる。ウルドゥ語は、能格言語であり、他動詞の主語があれば、能格を示す助詞 $-ne$ が付くが、自動詞の主語と他動詞の目的語には、何も付かない。つまり、他動詞の主語は特別で、自動詞の主語と他動詞の目的語は、同じように振る舞う。(8)は、自動詞の例、(9)は、他動詞の例である。以下では、 $-Erg$ ($ergative$ =「能格」の略) は、能格の助詞であることを示す。

(8) John yahan ponhcha.
 ジョン ここに 着いた
 ‘ジョンがここに着いた。’

(9) John-ne kitab khareedi.
 ジョン-Erg 本 買った
 ‘ジョンが本を買った。’

他動詞の主語には、能格助詞が付かなければならず、もし自動詞の主語にそれが付いたら、文は、(10)で示すように、非文となる。

(10) * John-ne yahan ponhcha.
 ジョン-Erg ここに 着いた
 ‘ジョンがここに着いた。’

次に、エヴェンキ語の二重目的語を取る例を見てみよう。

(11) Tinu Mandi- \emptyset ayo dotere- \emptyset Xiwen-di bo-se.
 昨日 マンディ-Nom その 本-Acc シヴェン-Dat あげ-た
 ‘昨日マンディが、その本をシヴェンにあげた。’

与格は、 $-di$ で表される。

続いて、エヴェンキ語の属格は、(12)と(13)で見るように、 $-ni$ である。

(12) mi-ni dotere

私-Gen 本
‘私の本’

- (13) Awo-ni obor-ø eru?
誰-Gen 態度-Nom 良い
‘誰の態度が良いの?’

次に、エヴェンキ語の埋め込み文を持つ文を見てみよう。

- (14) Mandi-ø Xiwen-ø teya dotere-ø ka-saa unkanbate-jirang.
マンディ-Nom シヴェン-Nom その 本-Acc 買った 思っている
‘マンディが、シヴェンがその本を買ったと思っている。’
- (15) Mandi-ø Xiwen-ø mete-se unkanbate-jirang.
マンディ-Nom シヴェン-Nom 笑った 思っている
‘マンディが、シヴェンが笑ったと思っている。’
- (16) Mandi-ø Xiwen-be teya dotere-ø ka-saa gun-jirang.
マンディ-Nom シヴェン-Acc その 本-Acc 買った 言っている
‘マンディが、シヴェンがその本を買ったと言っている。’
- (17) Mandi-ø Xiwen-be mete-se gun-jirang
マンディ-Nom シヴェン-Acc 笑った 言っている
‘マンディが、シヴェンが笑ったと言っている。’

上記の例からわかるように、エヴェンキ語の補文化標識は、音形を持たず、また、埋め込み文の主語は、主格でも対格でも表示される。

最後に、エヴェンキ語の関係節を見てみよう。

- (18) [Eyo bitihi-ø ka-saa] bei-xi Mandi.
[この 本-Acc 買った] 人-Top マンディ
‘この本を買った人は、マンディだ。’

(18)からわかるように、日本語や他のアルタイ語同様、エヴェンキ語において、関係節は、主要部名詞の前に置かれる。

3.2. 属格主語を持つ例

これらの背景をもとに、エヴェンキ語に属格主語が存在するかどうか調査する。(19)は、主格主語を持つ単文である。(20)でみるように、属格主語は、不可能である。

- (19) Xiwen-ø eyo shuiguo-ø ji-cha.
シヴェン-Nom この 果物-Acc 食べた
‘シヴェンが、この果物を食べた。’
- (20) * Xiwen-ni eyo shuiguo-ø ji-cha.
シヴェン-Gen この 果物-Acc 食べた
‘シヴェンの、この果物を食べた。’

一方、(19)と(20)を関係節化すると、(22)で見られるように、明らかに、属格主語が可能であることが分かる。

- (21) Eyo-xi Xiwen-ø ji-cha shuiguo-ni.
これ-Top シヴェン-Nom 食べた 果物-Gen
‘これは、シヴェンが食べた果物だ。’
- (22) Eyo-xi Xiwen-ni ji-cha shuiguo-ni.

これ-Top シヴェン-Gen 食べた 果物-Gen
 ‘これは、シヴェンの食べた果物だ。’

エヴェンキ語と日本語との違いは、前者においては、関係節の主要部名詞の後に、属格-*ni* が現れることである。

さらに、時間を示す名詞を修飾する関係節においても、属格主語は、可能である。

(23) Tinu Xiwen- \emptyset mete-se-tiamasehi hakujiiao-ni mete-se.
 昨日 シヴェン-Nom 笑った-後で みんなも 笑った
 ‘昨日シヴェンが笑った後で、みんなも笑った。’

(24) Tinu Xiwen-ni mete-se-tiamasehi hakujiiao-ni mete-se.
 昨日 シヴェン-Gen 笑った-後で みんなも 笑った
 ‘昨日シヴェンの笑った後で、みんなも笑った。’

(25) Tinu Xiwen- \emptyset mete-jiu-telin Mandi- \emptyset mete-se.
 昨日 シヴェン-Nom 笑う-前-に マンディ-Nom 笑った
 昨日シヴェンが笑う前に、マンディが笑った。

(26) Tinu Xiwen-ni mete-jiu-telin Mandi- \emptyset mete-se.
 昨日 シヴェン-Gen 笑う-前-に マンディ-Nom 笑った
 昨日シヴェンの笑う前に、マンディが笑った。

次に、(27)で見られるように、形容詞の主語も、日本語同様、属格で表示することができる。

(27) mento-ni antansi haqiao-ni ayo haqiao.
 ラーメン-Gen うまい 店-Gen この 店
 ‘ラーメンがうまい店は、この店だ。’

次に、日本語においては、他動性制限 (Transitivity Restriction (Watanabe (1996)))がかかるが、エヴェンキ語では、かからない。上述したように、(11)は、2重目的語を持つ動詞の例である。

(11) Tinu Mandi- \emptyset ayo dotere- \emptyset Xiwen-di bo-se.
 昨日 マンディ-Nom その 本-Acc シヴェン-Dat あげ-た
 ‘昨日マンディが、その本をシヴェンにあげた。’

(11)の間接目的語を関係節化すると、(28)と(29)共に、文法的文となる。

(28) Tinu Mandi- \emptyset ayo dotere- \emptyset bo-se bei-ni Xiwen.
 昨日 マンディ-Nom その 本-Acc あげ-た 人-Gen シヴェン
 ‘[昨日マンディが、その本をあげた]人は、シヴェンだ。’

(29) Tinu Mandi-ni ayo dotere- \emptyset bo-se bei-ni Xiwen.
 昨日 マンディ-Gen その 本-Acc あげ-た 人-Gen シヴェン
 ‘[昨日マンディの、その本をあげた]人は、シヴェンだ。’

日本語では、(28)に対応する文は、文法的であるが、(29)に対応する文は、非文法的であると判断される傾向がある。

さらに、エヴェンキ語においては、日本語と同様に、明らかな関係節ではない「まで」節においても、属格主語が出現できる。

(30) Mandi- \emptyset woden- \emptyset isitehin azhende hajiu-di bi-see.
 マンディ-Nom 雨-Nom 止む まで オフィス-に いた
 ‘マンディが、[雨が止むまで]、オフィスにいた。’

(31) Mandi- \emptyset woden-ni isitehin azhende hajiu-di bi-see.

マンディ-Nom 雨-Gen 止む まで オフィス-に いた
 ‘マンディが、[雨の止むまで]、オフィスにいた。’

さらに、日本語と同様に、「やいなや」節においても、属格主語が出現できる。

(32) Tinu Xiwen- \emptyset telinmete-telin Mandi- \emptyset mete-se.
 昨日 シヴェン-Nom 笑う-やいなや マンディ-Nom 笑った
 ‘[昨日シヴェンが笑うやいなや]、マンディが笑った。’

(33) Tinu Xiwen-ni telinmete-telin Mandi- \emptyset mete-se.
 昨日 シヴェン-Gen 笑う-やいなや マンディ-Nom 笑った
 ‘[昨日シヴェンの笑うやいなや]、マンディが笑った。’

一方、条件節では、日本語と同様に、属格主語が出現できない。

(34) Xiwen- \emptyset mete-se-ke, hakujaora- \emptyset xiaoninkaihaleda.
 シヴェン-Nom 笑った-ら みんな-Nom 驚くだろう
 ‘シヴェンが笑ったら、みんなが驚くだろう。’

(35) * Xiwen-ni mete-se-ke, hakujaora- \emptyset xiaoninkaihaleda.
 シヴェン-Gen 笑った-ら みんな-Nom 驚くだろう
 ‘シヴェンが笑ったら、みんなが驚くだろう。’

(36) Xiwen- \emptyset mete-se-kejialin, aokete- \emptyset xinkaihaleda.
 シヴェン-Nom 笑って-も 誰も-Nom 驚かないだろう
 ‘シヴェンが笑っても、誰も驚かないだろう。’

(37) * Xiwen-ni mete-se-kejialin, aokete- \emptyset xinkaihaleda.
 シヴェン-Gen 笑って-も 誰も-Nom 驚かないだろう
 ‘シヴェンが笑っても、誰も驚かないだろう。’

4. 議論

上記のデータから、仮説 (1)は、妥当であり、エヴェンキ語には、属格主語が存在することが明らかになった。

(1) 仮説: エヴェンキ語は、アルタイ諸語の一つであるから、属格主語が存在するはずである。

いったん、エヴェンキ語が属格主語を有する言語であることが明確になると、次の問いが出てくる。アルタイ語においては、モンゴル語も属格主語を有することが明確であるが、エヴェンキ語の属格主語の分布は、モンゴル語や日本語の属格主語の分布とほぼ同様であるのか、あるいは、決定的に異なる点があるのかという問いである。このことが明確になると、属格主語認可の観点から、アルタイ語内部における類型論の確立に貢献することになる。そこで、以下では、これまでエヴェンキ語で見えてきた例のモンゴル語の対応例を見ながら、エヴェンキ語、モンゴル語、そして、日本語の属格主語の分布の異同について考察していく。

以下では、Maki グループ(Maki et al. (2015, 2016)、Yiliqi et al. (2017))によって報告されている例と Lina Bao (私信) による例に基づき、モンゴル語の例を提示して行く。まず、モンゴル語は、当然、関係節において、属格主語が出現する。

(38) Öcügödür Ulayan- \emptyset /*-u nom- \emptyset qudaldun-ab- \dot{c} ai.
 昨日 ウラーン-Nom/-Gen 本-Acc 買い-取った (終止形)
 ‘昨日ウラーンが/*の本を買った。’

(39) Öcügödür Ulayan- \emptyset /*-u t qudaldun-abu- \dot{y} san/*-ab- \dot{c} ai nom-bol
 昨日 ウラーン-Nom/-Gen 買い-取った (連体形) /-取った (終止形) 本-Top
 ene nom.
 この 本

‘昨日ウラーンが/の買った本は、この本だ。’

さらに、モンゴル語においても、時間を示す名詞を修飾する関係節において、属格主語は、可能である。

- (40) Bi-ø yayarau-bar Ulayan-ø/-u suryayuli-du ire-gsen edür-i
私-Nom 急いで ウラーン-Nom/-Gen 学校-に 来-た (連体形) 日-Acc
čegejile-jü bai-na.
覚えて-CVS (=不定詞) いる (終止形)
‘私は、急いでウラーンが/の学校に来た日を覚えている。’

ところが、モンゴル語においては、エヴェンキ語や日本語と異なり、形容詞の主語が、属格で表示されない。

- (41) [ɣaray-un jiryuyan-du öndege-ø/*-yin kimta] qudalduya
[土曜日-に 卵-Nom/-Gen 安い] 店
‘土曜日に卵が/の安い店’
- (42) [t ɣaltu tergen-u örtege-ø/*-yin bai-qu ügei] qota
[鉄道-の 駅が/*の 存在-する (連体形) 否定] 街
‘鉄道の駅が/の無い街’

しかしながら、属格マーカーを所有代名詞 (3人称) の-*ni*に変更すると、文法的文となる。

- (43) [ɣaray-un jiryuyan-du öndege-ni kimta] qudalduya
[土曜日-に 卵-PoP.3 安い] 店
‘[土曜日に卵が安い]店’
- (44) [t ɣaltu tergen-u örtege-ni bai-qu ügei] qota
[鉄道-の 駅-PoP.3 存在-する (連体形) 否定] 街
‘[鉄道の駅がない]街’

この所有代名詞は、それぞれ、関係節の主要部名詞が所有者であることを意味している。エヴェンキ語と日本語には、所有代名詞は、存在しない。

次に、エヴェンキ語におけるのと同様、モンゴル語においても、他動性制限 (Transitivity Restriction (Watanabe (1996)))がかからない。

- (45) [öcügedür Bayatur-ø/-un Ulayan-i mayta-ɣsan] uçir
[昨日 パートル-Nom/-Gen ウラーン-Acc 褒め-た (連体形)] こと
‘昨日パートルが/のウラーンを褒めた] こと’

さらに、モンゴル語においても、エヴェンキ語と同様に、明らかな関係節ではない「まで」節において、属格主語が出現できる。

- (45) Batu-ø [boruyan-ø/-u joysu-qu boltala] alban ger-tü bai-la.
バトゥ-Nom [雨-Nom/-Gen 止-む (連体形) まで] オフィス-に いた (終止形)
‘バトゥは、雨が/の止むまで、オフィスにいた。’
- しかしながら、エヴェンキ語と異なり、「やいなや」節においては、属格主語が出現できない。
- (46) Bayatur-ø/*-un ende ire-megče, Ulayan-ø surulča-ju ekile-jei.
パートル-Nom/-Gen ここに 来る-や否や ウラーン-Nom 勉強し-CVS 始めた (終止形)
‘パートルがここに来るや否や、ウラーンは、勉強し始めた。’

最後に、条件節や理由節などの付加節では、エヴェンキ語と同様、属格主語が出現できない。

- (47) Qoyar çay-un daraya Ulayan-ø/*-u ende ire-bel, bögüdeger-ø yaçıyda-na.

2時間-Gen 後に ウラーン-Nom/-Gen ここに 来-たら みんな-Nom 困る-だろう (終止形)
 ‘2時間後にウラーンがここに来たら、みんなが困るだろう。’

(48) Qoyar çay-un daraya Bayatur-ø/*-un ende ire-gsen çü,
 2時間-Gen 後に バートル-Nom/-Gen ここに 来-て も
 Ulayan-ø tegün-tei ayulja-qu ügei.
 ウラーン-Nom 彼-Dat 会-う (連体形) 否定
 ‘たとえ2時間後にバートルがここに来ても、ウラーンは、彼に会わないだろう。’

(49) Öcügedür Ulayan-ø/*-u suryayuli-du ire-gsen ügei uçir-aça,
 昨日 ウラーン-Nom/-Gen 学校-に 来-た (連体形) 否定 ので
 бүгүдегер-ø sedkil joba-jai.
 みんな-Nom 心から 心配した (終止形)
 ‘昨日ウラーンが学校に来なかったので、みんなが心から心配した。’

上記の調査結果より、エヴェンキ語・日本語・モンゴル語の属格主語の分布には、一定の相違があることが分かった。その相違は、(50)の表にまとめられる。

(50) エヴェンキ語・日本語・モンゴル語の属格主語の分布の比較

	エヴェンキ語	日本語	モンゴル語
属格主語 (動詞)	OK	OK	OK
属格主語 (動詞) まで節	OK	OK	OK
属格主語 (動詞) やいなや節	OK	OK	*
属格主語 (形容詞)	OK	OK	*
他動性制限	なし	あり	なし

(50)より、次のことが統語理論に対して言える。(I) アジアの対格言語のかかなりの言語は、属格主語を許容し、(II) これらの属格主語を許容する言語は、大きく、エヴェンキ語型とモンゴル語型とに分けられ (形容詞と属格主語)、(III) 日本語は、モンゴル語型というよりも、エヴェンキ語型に入り、他動性制限が独立した重要な言語要素であるなら、エヴェンキ語は、日本語とモンゴル語との中間に位置する性質を持っていることになる。

参考文献

- Harada, Naomi (2002) *Licensing PF-Visible Formal Features: A Linear Algorithm and Case-Related Phenomena in PF*, Doctoral dissertation, University of California, Irvine.
- Harada, S.-I. (1971) “Ga-No Conversion and Ideolectal Variations in Japanese,” *Gengo Kenkyu* 60, 25–38.
- Hiraiwa, Ken (2001) “On Nominative-Genitive Conversion,” *MIT Working Papers in Linguistics 39: A Few from Building E39*, ed. by Elena Guerzoni and Ora Matushansky, 66–125, Cambridge, MA.
- Kobayashi, Yukino (2013) *Japanese Case Alternations within Phase Theory*, Doctoral dissertation, Sophia University.
- Maki, Hideki, Lina Bao, Wurigumula Bao and Megumi Hasebe (2016) “Scrambling and Genitive Subjects in Mongolian,” *English Linguistics* 33, 1–35.
- Maki, Hideki, Lina Bao and Megumi Hasebe (2015) *Essays on Mongolian Syntax*, Kaitakusha, Tokyo.
- Miyagawa, Shigeru (1993) “Case-Checking and Minimal Link Condition,” *MIT Working Papers in Linguistics 19: Papers on Case and Agreement II*, ed. by Colin Phillips, 213–254, Cambridge, MA.
- Miyagawa, Shigeru (2011) “Genitive Subjects in Altaic and Specification of Phase,” *Lingua* 121, 1265–1282.
- Miyagawa, Shigeru (2012) *Case, Argument Structure, and Word Order*, Routledge, New York.
- Miyagawa, Shigeru (2013) “Strong Uniformity and Ga/No Conversion,” *English Linguistics* 30, 1–24.
- Nedjalkov, Igor (2014) *Evenki*, Routledge, London.
- Ochi, Masao (2001) “Move F and Ga/No Conversion in Japanese,” *Journal of East Asian Linguistics* 10, 247–286.
- Ochi, Masao (2009) “Overt Object Shift in Japanese,” *Syntax* 12, 324–362.
- Watanabe, Akira (1996) “Nominative-Genitive Conversion and Agreement in Japanese: A Cross-linguistic Perspective,” *Journal of East Asian Linguistics* 5, 373–410.
- Yiliqi, Hideki Maki, Lina Bao and Megumi Hasebe (2017) “Subjects of Stative Predicates in Prenominal Sentential Modifiers in Mongolian,” *Handbook of the 155th Meeting of the Linguistic Society of Japan*, 354–359.

* エヴェンキ語のデータに関して、Sarina 氏に心より感謝する。また、モンゴル語のデータに関して、Lina Bao 氏に深く感謝する。本稿の全ての誤りは、筆者によるものである。